

## 太田俊雄の宗教教育思想（2）

山田耕太

### 1. はじめに

前稿では、太田俊雄の50年近い教師生活を四期に分けて、その第二期にあたる、シカゴ近郊のノースセントラル大学（North Central College）とエヴァンジェリカル・セオロジカル神学校（Evangelical Theological Seminary）で学んだ留学時代（1949-1952年）に特に関心を注いだ宗教教育思想に光を当てて、日本聖書神学校教授時代（1952-1966年）に著わした論文を資料にして考察し、敬和学園高校で教育実践を展開した背景を明らかにした。すなわち、太田俊雄の宗教教育思想は、ホーレス・ブッシュネルの『キリスト教養育』を展開し、ホワイトヘッドのプロセス神学をデューイのプロセス教育学と統合しようとして関係性と経験を重んじたランドルフ・C・ミラーの宗教教育思想を土台にしていること、さらに、クリークやプラットらの影響をも受けていることを明らかにした。<sup>(1)</sup>

本稿では、アメリカ留学時代に探求した宗教教育思想以前に、太田俊雄の教師生活の第一期にあたる宮城県立古川高等女学校・青森県立旧制青森中学校・滋賀県立旧制水口中学校・大阪府立旧制八尾中学校・大阪の私立燈影女学院高校での英語教師時代（1935-1949年）に遡ってみることにする。その上で、太田俊雄に決定的に影響を与えた宗教教育思想を明らかにし、それを敬和学園高校の教育実践においてどのように展開しようとしたかを述べてみたい。

太田俊雄は一方では英語教師として、最新のオーラルメソッドを大胆に取り入れて、優れた教育実践をしていた。しかし、他方では「神をおそれることなくして教育をすれば、あなたの生徒は賢明なる悪魔になる」という諺に表わされるように、英語教育だけでいいのか、と悩みながらも宗教教育を模索していた。<sup>(2)</sup> そして、その探求の末に辿り着いた「三大教育者」として、小原国芳、羽仁もと子、河井道の名前をしばしば挙げた。<sup>(3)</sup> とりわけ、「教育プログラムに勤労を取り入れている」労作教育のモデルとして、羽仁もと子の自由学園、河井道の恵泉女学園、小原国芳の玉川学園について言及した。<sup>(4)</sup> しかし、太田俊雄が1935年に英語教師となった最初期から、陸前古川高女・青森中学・水口中学に勤務した1941-42年頃までの7年間に、最も影響を受けたのは、<sup>(5)</sup>「玉川のオヤジ」<sup>(6)</sup>とも呼んでいた玉川学園の小原国芳であった。太田俊雄の教師時代の最初期は、小原国芳が玉川学園を始めた最初期とほぼ重なり、太田は小原の玉川学園に最初期から注目していたことに

なる。

## 2. 新教育運動としての大正自由教育

日本教育史上では、小原国芳や羽仁もと子の教育は大正時代の新教育運動、すなわち大正自由教育に位置づけられる。<sup>(7)</sup>

1890年の教育勅語の発布と新小学校令の制定によって、自由民権運動は下火となり、欧化主義から国粹主義へと大きく振り子が振れていき、画一的な注入教育、権力的な取り締まりによる上からの教育によって、国民に天皇への絶対的忠誠を誓わせる「臣民教育」が浸透していった。しかし、第一次世界大戦(1914-18年)前後は、国際的にも国内的にも、民主主義への機運が高まった「大正デモクラシー」の時期であった。それと呼応して、ヨーロッパやアメリカで文芸革新運動・ロマン主義運動・表現主義運動などが密接に関連して児童中心・生活中心の自由主義的な新教育運動がおこり、日本でもその影響を受けて、「大正自由教育」と呼ばれる新教育運動が盛んになっていた。

「大正デモクラシー」の中で、顕著な教育活動をしたのは、沢柳政太郎が京大総長の職を辞して1917年に始めた成城小学校であった。これは大正自由教育の先駆的学校であり、実験校として牽引的な役割を果たしていった。その教育方針として、教育勅語による画一教育や形式教育や注入教育に対して修身科を廃じて、①調和ある人格養成の教育、②個性の尊重、③自学自律、④能率高き教育、⑤学的根拠に立てる教育、⑥自然尊重の教育、⑦子弟間の尊重、を掲げた。<sup>(8)</sup>

1921年には、大正自由教育を象徴する出来事として、東京で「八大教育主張講演会」が開催された。その中で、東京高等高師教授樋口長市の「自学教育」、高輪南小主事河野清丸の「自動教育」、千葉師範附属小主事手塚岸衛の「自由教育」、広島師範附属小主事千葉命吉と稲毛詛風の「創造教育」、明石女子師範附属小主事及川平治の「動的教育」、ロシア文学者片上伸の「文芸教育」が主張された。<sup>(9)</sup> 小原国芳は七番目に、1918年に京都帝国大学に提出した卒業論文『宗教による教育の救済』(後に『教育の根本問題としての宗教』と改題)のエッセンス「全人教育」を講演で主張した。<sup>(10)</sup>

小原国芳は、1887年に鹿児島に生まれ、鹿児島師範、広島高等師範を経て、1913年に香川師範教諭となった。その後、京都帝国大学に入学し、同哲学科を卒業後、1918年に広島高等師範教諭となった。その後、1919年に長田新の推挙で成城小学校主事になり、1922年に第二成城中学を開設し、1925年に世田谷・砧村に成城学園を移転して学園町を作り、1926年に旧制成城学園高校を開校しその校長となった。だが、成城学園高校が帝国大学の予備校化するに及び、教育の理想を実現するために、1929年には成城学園から分かれて新たに玉川学園を開設した。その際に、小原は成城学園の7カ条の教育方針に、

⑧労作教育、⑨反対の合一、<sup>(11)</sup> ⑩第二里行者と人生の開拓者、<sup>(12)</sup> ⑪塾教育、⑫国際教育、という5カ条を加え、成城学園の方針①「調和ある人格養成の教育」を「全人教育」に変え、玉川学園の方針12カ条とした。<sup>(13)</sup>

ほぼ同時期に、小原の広島高等師範時代の先輩である赤井米吉は成城学園から分かれて、1924年に明星学園を創始した。赤井米吉はキリスト教的社会主義に立脚し、「進むとは働くことなり。新たにすとは、生産することなり」という標語を掲げて、労働をカリキュラムの中に取り入れた教育を始めた。小原国芳と赤井米吉にキリスト教人格教育者として多大な影響を与えた人物に、本間俊平がいたことも忘れてはならない。本間は山口県秋吉台の大理石の採掘事業を行っていた人物で、学生・青年・労働者に労働を通じた伝道をしていた。<sup>(14)</sup>

これらの流れとは別に、羽仁もと子は夫の吉一と共に、1921年に真の「自由人をつくる」ことを目指して自由学園を始めた。時代は少し下り昭和に入るが、河井道はYWCA総監事の職を経て国際的な規模で活動を広げて活躍していく中で、国際的な視野をもって活躍できる女性の育成の必要性を感じて、1935年に恵泉女学園を開設した。<sup>(15)</sup>

しかし、1920年に森戸事件が起こった。この事件は東京帝国大学助教授森戸辰男が「クロポトキンの社会思想の研究」を発表したことによって辞職を迫られたものである。この事件以降に、文部省をはじめとして時の政府は、反権力・反体制思想に対して次第に干渉し弾圧を加えていくようになり、大正自由教育は下火になっていった。その中で、小原国芳は自らの教育論を引き続き主張し続けていたのではあったが、戦時下体制が強化されていく中で書いた「教育目標論」において国家主義支持の立場を明確にするようになり、次第に国家主義と癒着していったのであった。<sup>(16)</sup>

戦時下の中で太田俊雄は、小原の教育思想に共鳴してはいたが、日曜学校でキリスト教を説いたことを理由にして学校をやめさせられて勤務地を変えたことが度々あった。時には特高警察が説教を聞きに来て後をつけられることもあったが、逆に非国民という疑いを晴らすために、近くの警察署の柔道場に向いて寒稽古に励んだこともあった。太田は、大正自由教育の羽仁もと子と小原国芳らに河井道を加えて、彼らが行った新教育運動は「知識だけの教育だけではなく、心の教育」<sup>(17)</sup>を行ない、彼らは「教えるのは教材ではなく、生徒なのだ」<sup>(18)</sup>と主張したと総括する。

### 3. 小原国芳の宗教教育思想「全人教育論」

小原国芳は、玉川学園での教育実践を始める前に、1919年に京都帝国大学の卒業論文を改題して『教育の根本問題としての宗教』を出版し、さらに1925年には『母のための教育学』によって全人教育論という教育思想を完成した。その間に、1920年『教育改造論』、

1923年『教育の根本問題としての哲学』、1924年『理想の学校』と、毎年のように教育実践の中から理論の構築を試みていた。これらの一連の著作に一貫した小原国芳の根本の関心ごとは、宗教と教育の問題である。それは知育に偏重した教育を批判し、バランスの取れた人間の教育を理想として、その実現を意図したものであった。

小原国芳は、シュライエルマッハーの『宗教論』や波多野精一の宗教哲学を土台にして宗教教育思想を構築した。小原は「宗教」を「神と人との関係」「神と人との合体」と定義し、それは「本源と結び付くこと」「再結・復帰・復旧」であり、「以前に隔離しており、分裂しており、相違していたものが、融合し、統一し、合一すること」とする。<sup>(19)</sup>

小原国芳の教育論である「全人教育」は、このような宗教論と表裏一体をなし、教育の内容は人間文化の一切を含むものとする。すなわち、人間の文化を支えるものとして宗教を位置づけ、宗教教育を教育の根底に据える。すなわち、人間の心の働きとして知情意の三作用があり、それらに応じて知の所産である「哲学」(学問・科学)の世界、感情の所産である「芸術」の世界、意志の所産である「道徳」の世界が展開され、それらを越えて根拠づけるものとして「宗教」の世界があり、それぞれ真善美聖を「絶対価値」とする。<sup>(20)</sup> それに対して、人間の生命保存と精神活動の源として「健康」が求められ、また精神活動を支えるために「富」(政治・経済など)が求められ、それらを「相対価値」とする。このような「全人」概念に対応して、「全人教育」は「宗教教育」「芸術教育」「学問教育」「道徳教育」「健康教育」「生活教育・富の教育(政治経済教育)」で構成される。<sup>(21)</sup>

小原国芳は京都帝国大学の卒業論文の執筆から成城学園での教育実践を経て、以上のような教育理論を構築し、また補強していた。成城学園高校では、毎週2時間の音楽を必修とし、課外活動における芸術活動の課題を重視して、芸術的教育を中心にした調和的全人教育の実践をしていた。だが、成城学園高校が進学校となり、大学への進学準備が教育の中心となっていったので、成城学園から分かれ、玉川学園を創立した。それを機に、成城学園での芸術的教育を中心にした調和的全人教育に宗教(礼拝)と労働(労作)を加えたのであった。小原は最初期には、江戸時代の咸宜園などの塾教育の師弟関係を理想として、宗教教育(礼拝)と労作教育に基づいた私塾的な学園を創ることを意図した。

こうして、ギリシア的な真善美を求める人間的教養の基礎である「学問教育」「芸術教育」「道徳教育」は、それぞれ「知」「情」「意」という人間の内面の教育をめざすものと位置づけられた。さらに、それを支える「健康教育」「生活教育」という人間の外面の教育と、超越的なものに目を向ける「天としての宗教性(礼拝)」と大自然の中での「地としての労働性(労作)」を加えて「全人教育」の理念ができあがった。ここに、「全人教育」の実践において、天上なるものと地上なるものを人間において統一し、天地人における知行合一を徹底して目指すことになった。この背景には中江藤樹の弟子熊沢蕃山の「身を立つる

とは全人なり、全人とは道器合一の身也」という天地人の三界の一貫性を説く陽明学の思想がある。<sup>(22)</sup>

太田俊雄は、古川高女・青森中学・水口中学の英語教師時代に、主に『教育の根本問題としての宗教』と『母のための教育学』を通して小原国芳の宗教教育思想を知り、またその教育実践に心酔した。長男の敬雄が生まれた時には、「この子は小原国芳先生に教育していただこうと妻と語り、貧乏教師の薄給の中から十数年をかけて玉川学園におくる準備をした。」<sup>(23)</sup> 実際に長男の敬雄ばかりでなく、次男の信雄も玉川学園で教育を受けた。<sup>(24)</sup>

#### 4. 羽仁もと子の宗教教育思想<sup>(25)</sup>

羽仁もと子は、1873年に青森県八戸に生まれ、15歳で上京して府立第一高等女学校に編入、1890年に明石町教会で受洗した。1891年『女学雑誌』の編集者である岩本善治の明治女学校高等科に入学し、雑誌の校正を手伝うようになる。しかし、「明治女学校にはキリスト教思想があるが、信仰がない」ので学校に戻らず（記録では速記科卒業）、1892年に郷里で小学校教師となった。その後、カトリックの盛岡女学校（後の白百合学園）で国語と修身を教えた。1896年に京都で結婚するが半年で離婚し、1897年に再び上京し報知社（後の報知新聞社）で女性最初の新聞記者となった。1901年に同社の記者・編集長となった七歳年下の山口県三田尻生まれのキリスト者羽仁吉一と結婚し、夫妻はやがて退社した。

羽仁夫妻は、1903年の長女説子の誕生の翌日に、「よい家庭を生み出すため」に『家庭之友』を発刊し、それは三女恵子が誕生した1908年に『婦人之友』の発刊へと発展した。説子と恵子が受けた小学校教育は、子供の考える心を育てない詰め込み教育であり不満であった。そこで1921年には『婦人之友』の読者の子供の教育のために、「思想しつつ、生活しつつ、祈りつつ」という理念を具体的に実現する目的で、雑司ヶ谷（西池袋）に自由学園を開設した。翌年にはフランク・ロイド・ライト設計の校舎を建てた。「過去の価値観の継承よりも将来の価値観の創造に重きを置いた教育」を象徴するために、この校舎を「明日館」（みょうにちかん）と名づけた。

自由学園という名称は「人間の真の自由は罪からの解放なしにはあり得ない」という信念に基づき、ヨハネ8章32節の「真理は汝らに自由を得さすべし」に由来する。命名は羽仁もと子が明治女学校時代にしばしば説教を聞きにいった当時の一番町教会牧師で、それ以来信仰の導き手・相談相手となっていた植村正久であった。羽仁夫妻は、植村正久が牧会した富士見町教会（後に一番町から富士見町に移転して改称）とも縁が深かったが、その後は教会に属さず無教会の立場を貫いた。

羽仁夫妻は、「教育の素人」とであると自称した。イエス・キリストを理想の教師として、

キリスト以外に先生はおらず、神の前に皆平等であり、先生も生徒もなく、人間同士は自由であるという人間観に基づいて教育を行なった。自分たちを先生という呼称を用いずに「ミセス羽仁」「ミスター羽仁」と呼ばせた。また、「よく教育することは、よく生活させることである」という「生活即教育」の考えに基づいて、生活の中で学習するデュニイの「生活学校」をモデルにしていた。そして、自分たちのことはできるだけ自分たちで行ない、雇い人がいない「自労自治」をその「生活学校」の中心に据えた。そして、創立3年目から毎朝礼拝を献げることから一日の学校生活を始めることがはじまった。1930年に全国友の会が結成され、自由学園は府下東久留米村南沢に校地を移転した。

##### 5. 河井道の宗教教育思想<sup>(26)</sup>

河井道は、1877年に伊勢神宮の神官を父に伊勢山田に生まれた。1885年に家族で北海道に移住し、札幌スミス女学校（後の北星女学校）で7年間学び、1895年に小樽の静修女学校（ミス・ローズのクリスチャン・スクール）で1年教えた。1897年に上京して津田梅子宅に寄宿して指導を受け、1898年にスミス女学校の歴史の教師でもあった札幌農学校教授の新渡戸稲造夫妻と渡米した。フィラデルフィアの予備校アイヴィ・ハウスで二年間学んだ後に、1900年に津田梅子が学んだプリンマー女子大学に入学し、1904年に同大学を卒業した。帰国して1904年から1916年まで当時一番町教会近くにあった津田英学塾の教授として英語を教えた。

一番町教会で植村正久牧師と出会い「人間は使命のうちに死ぬべきだ」という植村の言葉に感銘を受けた。その後、植村牧師の移動と共に富士見町教会の会員となり役員を務めた。1929年に牛込神楽坂の自宅に恵泉女学園を開校し、1930年に世田谷・千歳村に敷地と校舎を購入し移転した。

河井道は、プリンマー女子大学の2年生の時にYWCAの修養会に出て以来、YWCAに関係し、津田英学塾で教えながらも1905年の日本のYWCAの創設にかかわった。河井は1907年のWSCF（世界学生キリスト者連盟）東京大会という日本で最初の国際会議の開催に尽力した。また、1910年に世界YWCA第二回ベルリン総会で演説した。そのため、前後一年近くにわたって各地のYWCAから招かれてヨーロッパ視察旅行とカナダ・アメリカ各地の講演旅行をして見聞を広めた。また、1916年から1935年まで日本YWCAの日本人最初の総幹事を務めたが、日本YWCA総幹事に就任以降も、ヨーロッパ・アメリカの各地を視察・講演する旅行を度々重ねた。また、恵泉女学園設立前に、ヨーロッパ・アメリカの各地で国際教育と女子園芸教育を視察し、ジュネーブで国際連盟事務局次長をしていた新渡戸稲造を訪問した。<sup>(27)</sup> YWCAのこのような国際的社会的活動の経験の中から、河井道の内に宗教に根ざし平和のために国際的に活躍できる女性を育成する以下

に述べるような教育構想が確立してきた。

1927年に記した「学園設立の趣意書」では、第一次世界大戦後の世界が大きく変わりつつあり、「新しい生命の豊かな人格を養成すること、すなわち、次世代の国民の教育が最大の使命であり、急務であること」を訴え、「いままでの日本の教育は、唯物主義に偏重して宗教道徳を軽視し、知識ばかりを詰め込み、人格の形成をなおざりにしてきました」と批判する。「これがいま各方面で行き詰っている原因ではないでしょうか」と問題を提起し、それに代わる教育として「これを打開するためには、唯一の神を仰ぎ、世界のすべての人々を兄弟姉妹として愛し、奉仕する宗教を基盤にし、国際親善と世界平和を目的とした教育を展開しなければならない」と「聖書」と「国際」を柱とすることを冒頭で述べる。そして、「将来の希望は、普通教育に伴って、都市の女子には園芸の趣味を育て、農村の女子には園芸を科学的に教授すると同時に、既婚未婚を問わず、海外植民地への渡航を希望する人、あるいは職業として農園芸を修めたい女子のために、近い将来女子農園学校も新設したいと考えております」と述べ、「園芸」をこの学校の特色とした。

「園芸」を特色とするのは、札幌スミス女学校で「自然とは神の恵みが溢れているところ」ということを学び、草花を育てた経験に遡るが、農学者新渡戸稲造の影響もあったと推察される。<sup>(28)</sup> 河井の夢は1943年に高等部園芸科を設立し、1945年にそれを発展させて恵泉女子農芸専門学校を開設し、翌年には小平に新たに校地を得てそこに専門学校を移転させることで実現した。これは後に短期大学園芸学科に発展していった。

太田俊雄は、アメリカ留学前年の1948年のクリスマス直前に経堂の恵泉女学園長室を訪問した。その時、河井道は「太田さん、わたしが今命をかけているのが小平なのよ、ゼヒ小平も見ておいてね」と語った。ここから太田は「命がけの教育」という示唆と教訓を得た。<sup>(29)</sup>

## 6. 結びに：敬和学園の教育理念との関係

太田俊雄は敬和学園を開校前後に、その特色として「個性の尊重」「人格教育・全人教育」(宗教教育・労作教育・寮教育)「国際的視野に立つ教育」「日本人の教育」を挙げた。

これらのうちの最初の二つの項目「個性の教育」と「人格教育」は、ほぼ同じ事柄を言っている。それらは、「知育偏重教育」や暗記に象徴される「注入教育」に対して、「バランスの取れた人格教育」や「考える教育」「引き出す教育」を訴えた大正自由教育に遡るものである。それは小原国芳の言葉を用いれば「全人教育」ということになるが、そこには小原の宗教教育哲学が背景にある。「人格教育」には「宗教教育」が不可欠であり、労働を教育に取り入れた「労作教育」が不可欠であるという思想は、羽仁もと子や小原国芳、「園芸」「農」という言葉を用いる河井道にも共通する。そして、自由学園や恵泉女学園にも

寮はあったが、とりわけ敬和学園では寮教育が人格教育との関係で強調されている。寮教育は労作教育に象徴される生活教育とも密接に関係している。それらは玉川学園の「塾教育」の教育方針に見られるように、広瀬淡窓の咸宜園や吉田松陰の松下村塾などの塾教育に根ざした人格的触れ合いによる人格教育の思想が背景にあった。<sup>(30)</sup>「国際的視野に立つ教育」と「日本人の教育」も表裏一体をなす。これも玉川学園の教育方針の「国際教育」や恵泉女学園の「国際」に通じるものであるが、それは河井道の思想に典型的に見られるように、単なるコミュニケーションや国際親善を目指すものではなく、国際平和を希求する思想に基づくものである。河井道は、晩年には教育基本法の制定にかかわった教育刷新委員会で唯一人の女性として委員を務めた。

以上を一言でまとめると、敬和学園の教育方針を定めた太田俊雄の宗教教育思想の淵源は大正自由教育にあり、その中でもキリスト教の宗教教育（礼拝）と労作教育・生活教育・園芸教育に特徴がある小原国芳の玉川学園・羽仁もと子の自由学園・河井道の恵泉女学園の教育実践をモデルとしている。また、それを土台にしてブッシュネルやミラーのアメリカの宗教教育思想<sup>(31)</sup>によって「生涯教育」「人格教育」「人格形成」などを新たに肉付けして、敬和学園で教育実践を展開した。これらの宗教教育思想に基づいた高校での実践は、大学では「真理はあなたがたを自由にする」という言葉に教育目的が要約されるリベラル・アーツ教育、国際的な視野を養うグローバルな教育、地域社会に貢献する活動や事業（ボランティア活動、地域循環英語教育、新発田学研究センター、まちカフェりんく、新発田十二歳市、阿賀北ロマン賞、富塚のぞみの里など）として継承し展開している。こうして、真の人間教育を目指す教育実践が行なわれているのである。

## 註

- (1) 山田耕太「太田俊雄の宗教教育思想（一）」『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』第7号（2009年）、115-126頁。尚、前稿を発表した後に、ホーレス・ブッシュネル『キリスト教養育』（森田美千代訳、教文館、2009年）が出版された。
- (2) 「わたしの海外教室」（1970年）、『太田俊雄諸文集』（2009年）18頁、所収。この背景には、英語教師時代に陸前古川教会、青森長島教会、水口教会で日曜学校の教師もしていたことと密接な関係があると思われる。
- (3) 『敬和学園の教育—労作教育と国際精神の涵養』（敬和の教育 第1号）1978年、『太田俊雄諸文集』（2009年）93頁、所収。
- (4) 『敬和』第12号、1968年9月、『太夫浜卓話（1/3）』50-51頁。
- (5) 『敬和』第158号、1982年7月、『太夫浜卓話（3/3）』109頁。
- (6) 『敬和』第108号、1978年2月、『太夫浜卓話（2/3）』180-184、特に181、182、183頁；『敬和』第167号、1983年5月、『太夫浜卓話（3/3）』141頁；『敬和』第188号、1985年4月、『太夫浜卓話（3/3）』217頁；『敬和学園の教育—労作教育と国際精神の涵養』（敬和の教育 第1号）1978年、『太田俊雄諸文集』（2009年）93、103頁、所収。
- (7) 中野光『大正自由教育の研究』（教育名著選集⑥）黎明書房、1998年（初版、1968年）、中



- 野光『大正デモクラシーと教育』新評論、1977年、松川成夫「第二篇『大正期・共同討議』」のキリスト教学校教育同盟『日本キリスト教教育史（思潮篇）』創文社、1993年、219-338頁、に参照。
- (8) 沢柳政太郎は成城小学校を設立する際に、最初は①個性尊重の教育 ②付能率の高き教育、③自然と親しむ教育 ④付剛健不暁の教育、⑤心情の教育 ⑥付鑑賞の教育、⑦科学的研究を基礎とする教育、の四つの方針を掲げていたが、①-③は「新学校」に共通する教育であり④は成城小学校に特徴的であった（中野光『大正自由教育の研究』127-130頁）。これらに小原の「調和ある人格養成の教育」すなわち「全人教育」が加わった。
- (9) 小原国芳は後にこの人選からは、大正自由教育の代表である、奈良女子高等師範附属小主事の木下竹次（「自律的学習」「生活学習」「合科学習」）、お茶ノ水女子高等師範附属小主事の北沢種一（「作業教育」）、長野師範附属小主事の杉崎瑠（「気分教育」）が落ちていることを指摘している（小原国芳『全人教育論』「結び」、209-215頁）。
- (10) 講演「全人教育」は、小原国芳『全人教育論』玉川大学出版局（1969年）に所収。
- (11) ヘラクレイトスやブルーノの哲学に由来する小原の考えで、「天地融合」「物心一如」「霊肉合致」など全人教育と関連する思想。
- (12) マタイ福音書5章41節に由来し、「人生の最も苦しい、いやな、つらい、損な場面を、真先に微笑をもって担当せよ」という教え。
- (13) 浜田正秀「行動の美学」、小原哲郎編『全人教育の手がかり』玉川大学出版部、1985年、33-45頁、特に34-36頁。
- (14) 中野光『大正自由教育の研究』219-223頁。尚、本間俊平については本誌次号に掲載予定の「太田俊雄の宗教教育思想（3）」で詳しく紹介する。
- (15) キリスト教学校教育同盟『日本キリスト教教育史（人物編）』「キリスト教教育史における群像 八 羽仁もと子と河井道」創文社、1977年、68-77頁；古屋安雄「羽仁もと子と河井道：教会と学校」恵泉女学園創立70周年記念文集委員会編『恵泉の教育：継承と展開』新教出版社 2002年、所収。
- (16) 中野光『大正自由教育の研究』「第六章 国家権力と自由教育」、227-267頁。
- (17) 教育随想「感動の起こるとき」『親こそ最大の教師』1987年、オリオン印刷『太田俊雄著作より』（2009年）、153頁。
- (18) 『敬和』第182号、1988年10月、『太夫浜卓話（3/3）』193頁。
- (19) 小原国芳『教育の根本問題としての宗教（改版）』（小原国芳全集第一巻）、玉川大学出版局、1950年、2-3頁。
- (20) 小原は、プラトンが真善美の上に最高善を置き、カントがそれを聖と呼び、いずれも宗教を指す、という理解を根拠にする（『全人教育論』17頁）。
- (21) 小原国芳『教育の根本問題としての宗教（改版）』62-77頁、同『全人教育論』16-31頁。
- (22) 石橋哲成「小原国芳における具体的人間像の変遷試論」、小原哲郎編『全人教育への手がかり』玉川大学出版局、1985年、70-76頁。
- (23) 「敬和」第7号、1968年3月、『太夫浜卓話（1/3）』31頁；「敬和」第155号、1982年4月、『太夫浜卓話（3/3）』89頁。
- (24) 「敬和」第108号、1978年2月、『太夫浜卓話（2/3）』180-181頁。
- (25) 自由学園「羽仁もと子」『日本キリスト教教育史（人物編）』羽仁説子『私の受けた家庭教育：羽仁もと子の思出』婦人之友社、1963年；羽仁吉一『自由人をつくる：南沢講話集』婦人之友社、1991年；深田未来生「解説 生活に生きる言葉を語る」『羽仁もと子』（日本の説教6）日本キリスト教団出版局、2004年、247-269頁。
- (26) M. Kawai, *Sliding Doors*, Keisen Gakuen, 1950；関根文之助『河井道の生涯』新教出版社、1954年；河井道『わたしのランタン』新教出版社、1976年；木村恵子『河井道の生涯：光に歩んだ人』岩波書店、2002年；恵泉女学園『恵泉女学園短期大学誌』2009年。

- (27)新渡戸稲造は、1918年に開学された東京女子大学の初代学長も務めた。
- (28)新渡戸稲造の札幌農学校時代の同期生、内村鑑三の「読むべきものは聖書、学ぶべきものは天然（自然）、為すべきことは労働」にも通じる。大友浩「内村鑑三の『天然神学』について」『無教会研究』第13号（2010年）、43-67頁、参照。
- (29)『敬和』第177号、1984年4月、『太夫浜卓話（3/3）』177頁；『敬和学園の教育—労作教育と国際精神の涵養』（敬和の教育 第1号）1978年、『太田俊雄諸文集』（2009年）93頁、所収。
- (30)『敬和』第136号、1980年8月、『太夫浜卓話（3/3）』23頁；『敬和』第179号、1984年6月、『太夫浜卓話（3/3）』184頁；『寮うらばなし』（敬和の教育 第2号）1979年、『太田俊雄諸文集』96-105頁、所収。また、太田俊雄の「敬神愛人」のモットーは、西郷隆盛の「敬天愛人」に由来するとも考えられるが、太田自身は広瀬淡窓の「敬天」に言及している、『寮うらばなし』（敬和の教育 第2号）1979年、『太田俊雄諸文集』100頁、参照。
- (31)註1、参照。